

農作物技術情報 第5号 花き

発行日 平成21年 7月29日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

病害虫防除・選別等の出荷調製を徹底し、良品販売に努めましょう
収穫後の翌年に向けた管理を徹底しましょう
小ぎくの翌年用の母株選抜を、収穫前に実施しましょう

1 りんどう

- (1) 生育概況：早生種の施設栽培は、ほぼ出荷が終わり、露地栽培の早生種では、ほぼ平年並みの出荷となっています。草丈伸張期の乾燥の影響で平年に比べてやや草丈が短くなっています。
病害は全体には少なめに経過していますが、葉枯病が上位葉に見え始めています。また、ハダニ類等の害虫は全般にはやや少なめの発生となっていますが、アザミウマ類の発生が増加しています。
- (2) 栽培管理：長雨日照不足傾向となっているので、排水の確保をします。病害の発生に注意し薬剤散布を行います。また逆に着蕾後に圃場が極端に乾燥すると蕾が発達しにくくなります。圃場の水分を維持するように土壌水分管理に留意します。
- (3) 収穫・調製：気温が高い時期は収穫後の開花が進みやすいので、切り前を考慮します。またしおれやすいので収穫後は直射日光下におかず、できるだけ早く涼しい場所に移動し、水揚げするなど適切に管理します。雨天時や朝露で葉が濡れている場合は、収穫後に扇風機や切り花乾燥機等を利用して葉や花を十分に乾かしてから箱詰めするようにします。
生産者間の規格や品質の差がないように出荷目揃い会等で出荷基準を再確認し、規格を遵守して出荷します。病害虫被害や曲がりの混入が無い事はもとより、老化した花の混入も避けるように選別調製します。
- (4) 病害虫防除：病害は例年よりも発生が少なく経過していますが、葉枯病等の発生が見られた、長雨日照不足傾向となっているので、上位葉に発病しないように定期的に防除を行います。また、今後は花腐菌核病の発生動向にも注意します。例年8月中下旬(内陸平坦部)が防除開始時期ですが、夏期の気象条件により変動する場合がありますので防除情報に留意してください。
害虫はやや少なめの発生となっていますが、圃場によってはアザミウマ類、ハダニ類の発生が多く見られています。

ハダニ類は高温・乾燥条件で多発します。発生初期の防除を心がけるほか、薬剤の選定、葉裏への十分な散布などを徹底し確実に防除します。

アザミウマ類は、着蕾期から防除に加え圃場内外の雑草の処理を徹底します。また収穫後の残花での増殖が多いので、折り取り処分し防除します。さらに開花前に支柱を利用してシルバー反射テープを株周囲に張る事で、アザミウマの飛来が減少し発生密度を下げる事ができます。例年多発圃場では、薬剤散布と組み合わせた防除が効果的となります。

リンドウホソハマキの定植年株への被害も見られます。採花年株とあわせて防除します。

高温時の薬剤散布は、薬害が発生する可能性があり、早朝や夕方の比較的涼しい時間帯に散布を行うことを徹底するほか、薬剤使用上の注意事項を再度確認して、適切な散布により薬害発生を防ぎます。また周辺作物への飛散する事のないように十分注意して下さい。



反射テープによるアザミウマ防除

- (5) 収穫後管理：収穫後も病害虫防除を継続して茎葉を健全に保ち株養成に努めます。また収穫後に残っている茎の花の着いている部分を折り取り、害虫の寄生を防ぎ、受粉後に種子を作ることでの株の弱まりを防ぎます。

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

早生種では株の状態を確認して必要に応じて収穫後にお礼肥を施用します。施肥量は窒素・カリ成分主体で3～5kg/10aを基準とします。

2 小ぎく

- (1) 生育概況：8月咲き品種の開花は、平年と比べ並からやや早めとなっています。草丈は、定植後の乾燥の影響で短くなっています。病害虫は、平年に比べやや少なく推移していますが、アザミウマ類やハダニ類、ナモグリバエの被害が見られます。
- (2) 親株選抜：株の状態の判断は収穫後では難しくなるため、必ず収穫前に選抜します。開花期が狙う時期に合っていること、草丈がよく伸びて形質が品種特性を現し揃っていること、病害虫（特にウイルス、ウィロイド）に侵されていないこと等を確認して優良な株を選抜し、印をつけておきます。
- (3) 収穫・調製：出荷先に合わせた切り前とします。収穫後または選別後に水揚げを行います。雨天時の収穫の場合は、扇風機や切り花乾燥機を利用して葉と花の濡れを乾かします。
また、りんどうと同様に土壌水分が少ないと開花が進みにくいので、水分管理に留意します。
- (4) 収穫後管理：収穫後は選抜した親株とする株については、マルチを除去し追肥や土寄せを行います。また病害虫防除も継続します。収穫後にも芽が伸びて開花しますが、適宜刈り込んで伸びすぎないように管理します。

- (5) 病害虫防除：白さび病のほか、アブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類の防除を継続します。親株となるものに白さび病が感染していると翌年も発生する可能性が高くなります。



えそ病症状



わい化病株(囲んだ部分)

- (6) 病害感染株の徹底排除：キクえそ病(TSWV)や、わい化病(キクわい化ウィロイド)の被害が見られることがあります。これらはウィロイド、ウイルスの感染によるもので、感染に気づかず親株とすることで被害が拡大します。

症状が見られる株の抜き捨てを徹底するとともに、症状が見えないものでも感染している可能性があるため、感染率が高い品種は全てを捨てて親株を更新することも必要です。

3 ストック

- (1) 育苗管理：育苗中は気温上昇を避けるため、施設の開口部をなるべく大きくします。徒長を防ぎ充実した苗とするため、遮光資材は育苗前半のみとしますが、徐々に光に馴らすために曇天時などに取り除きます。育苗中の乾燥は厳禁ですが、過かん水は徒長の原因になるので、生育状態をよく観察してかん水します。
- (2) 八重鑑別：育苗中に2～3回に分けて八重鑑別を行います。発芽や生育が揃わないと比較がしにくくなるので、均一なかん水や温度管理に留意して生育が揃うよう管理します。セル成型育苗で鑑別する場合、残す苗の根を傷めないようはさみで切り取って除去します。
- (3) 定植：定植予定日に合わせ、圃場の準備を進めます。事前に十分かん水し、遮光資材を張って地温を下げておきます。
定植適期は本葉3～4枚の頃です。定植直後にかん水した後は、4～5日間かん水をせずに活着を進めます。その後は2～3日おきに十分かん水します。最初に根を深く張り、後半にかん水を控えても萎れないような株を作ります。また長期間の遮光は避け、定植後10日程度で除去します。
- (4) コナガ防除：定植時に殺虫剤(粒剤)を施用します。生育中は殺虫剤を散布しますが、抵抗性獲得を避けるため異なる系統の剤のローテーション使用を心がけてください。ハウスの開口部を防虫ネットで塞ぐことも効果的ですが、この場合は通気性の確保に留意してください。

次号は8月27日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

6月1日～8月31日は
農薬危被害防止運動期間です

近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
農薬の保管・管理は適切にしましょう